

## 野中葉



訳出した二つの短  
 編小説「イスラーム  
 教徒になりたいベイ  
 ビ」(Baby Ingin Masuk  
 Islam)と「処女で  
 ないマリヤ (Bukan  
 Perawan Maria)」は、共にフェビー・インディ  
 ラニ (Feby Indrani) の短編集『処女でないマ  
 リア』(二〇一七年) に収録されている。

作者のフェビーは、一九七九年、インドネシ  
 アのジャカルタ生まれ。父は西ジャワのスング  
 人、母は西スマトラのミナンカバウ人だが、フェ  
 ビーは両親のエスニックグループの伝統を引き  
 継がず、自分にはインドネシア人だと自認する。  
 また、自分の中にはイスラームが根付いている  
 という。実家の三軒隣にはモスクがあり、幼い  
 頃にはそのモスクの子供向け勉強会に参加し  
 た。彼女は、大学卒業後、いくつかの雑誌の記  
 者として働きながら、エッセイや短編小説を書  
 き貯めていった。

最近のフェビーの関心事は、インドネシア社  
 会の分断である。民主化後、社会で顕在化した  
 イスラーム化の動きが、二〇一〇年代に入って  
 以降、保守化していると論じられるようになって  
 きた。二〇一六年には、華人でクリスチャンの現  
 職ジャカルタ州知事がクルアーンを冒読したと  
 して、彼への抗議と退陣を求めるムスリムの民  
 衆たちが全国各地で大きなデモを引き起こし  
 た。シリア派やアハマディヤなど、イスラーム  
 の中のマイノリティに対する風当たりは強くな  
 り、一部では物理的な衝突が起こっている。ま  
 た他宗教に対する不寛容も広がり、排他的な言  
 動も目立つようになった。『処女でないマリヤ』  
 は、これまで穏健で寛容だと論じられ、また  
 自認してきたインドネシアのイスラームが、そ  
 の姿を変えていくような事態に対し、危機感を  
 持ったフェビーによる創作短編小説集である。  
 彼女自身の言葉を借りれば、この短編集の特徴  
 は、「マジカル・イスラーム」ファンタジーと  
 空想の世界を描きながら、そのテーマは現実社  
 会に現存する問題と確実に繋がっている。  
 「イスラーム教徒になりたいベイビ」は、入  
 信したい豚がいるという突拍子もないテーマを  
 扱いながら、権威主義化するウラマー集団を風  
 刺する。イスラームで食することを禁じられた  
 「豚 (バビ babi)」は、インドネシアでは負のイ  
 メージを持つ単語であり、しばしば他人を貶す

悪口として使われる。物語の豚の名前を「ベイ  
 ビ」としたのは、インドネシア語の悪口の一つ  
 である「バビ (babi)」を、愛らしいイメー  
 ジの英語の「赤ちゃん (baby)」と掛け合わせて  
 描く、作者フェビーのユーモアだと言える。さ  
 らに、物語の中のベイビは、goreの負のイメー  
 ジに反して、イスラームへの入信を切望し、あ  
 るキヤイ (主にジャワ島の伝統的イスラーム指  
 導者) にその願いを訴える。作品の中のキヤイ  
 たちの議論、そしてベイビの切なる入信希望に  
 対する否決が過半数を占める点は、今の社会状  
 況を反映していると読むことができそうだ。一  
 方で、主人公のフィクリのように、寛容さを持  
 ち続けるキヤイがいること、また、豚の味に関  
 心を示し、イスラームに入信するんだったら、  
 こっそり食べてみたいと思っている別のキヤイ  
 の存在を描くあたり、インドネシアの多様性と  
 大らかさをそれでも信じるという作者フェビー  
 の心意気を強く感じる。

「処女でないマリヤ」は、短編集全体のタイ  
 トルにも選ばれた本書を代表する作品である。  
 処女のまま預言者イーサ (イエス) を身籠り、  
 出産した聖母マリアと同じ名前を持つマリア  
 が、ある日突然、妊娠したことから、物語はス  
 タートする。まるで聖母マリアが預言者イーサ  
 を身籠った時のように、これは、誰とも関係を  
 持つことなしに実現した奇蹟の妊娠だった。マ

リアにはその確信があった。けれども、彼女は処女ではない。男性誌のモデルもやっている。

誰も信じてくれるわけがない。八方塞がりの状況の中でマリアの焦りや葛藤、また、この妊娠に驚き、父親になつてくれそうな男性を探したり、中絶を勧めたりして事態をなんとか収拾しようとする友人や家族とのやり取りがシリアスに、でもそこはかとなくコミカルに描かれる。処女でないこと、男性誌のモデルをやっていること、うしろめたさを感じながらも、男性との交わりなしに妊娠したことを信じてもらえず、独身のままで妊娠したことを咎める社会の風潮に対する、マリアの強い憤りや反発が、聖母マリアの妊娠と重ね合わせながら語られるのだ。処女のまま預言者イーサを身籠り出産し、現代に至るまで高貴な女性として崇拜される聖母マリアと、その一方で、同じ名前を持ち、同じように男性と交わることなく妊娠したにも関わらず、友達にも家族にも社会にも信じてもらえず、見放される惨めな現代のマリア。彼女を取り巻く生きづらさは、今のインドネシア社会を映し出す。

結局、マリアが出産したのは女兒だった。マリアはシングルマザーとして、赤ちゃんと二人で生きていくことを決意する。赤ちゃんは預言者ではなかったと、またマリアが聖母であるはずはないと皆に決めつけられ、非難されてもな

お、生まれたばかりの赤ちゃんに対しマリアが話す「私は信じているわ」という言葉には、イスラームや宗教が内包する奇蹟を信じ、寛容さを忘れない人々がいることに期待をかける作者フェビーの思いが伝わってくるように思う。